
魔法少女リリカルなのはGoseigers

ユロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはG o s e i g e r s

【Nコード】

N 4 7 2 0 Y

【作者名】

ユロン

【あらすじ】

キングビービを倒した地球に今度こそ平和が戻った。だが突然アラタの身体に電流が走り：

天装戦隊ゴセイジャーと魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s
のクロスオーバーです！

プロローグ（ゴセイジャー編）（前書き）

今回はゴセイジャーのみ登場です

プロローグ（ゴセイジャー編）

護星界からやってきた5人の見習い護星天使達。彼らは天装術を使い、天装戦隊ゴセイジャーとなって地球にはびこる悪しき魂達から地球の平和を守り続けてきた。

戦いを終えた彼らは見習いが外れ、護星天使となり地球でそれぞれの道を歩みだした。

ここはとある喫茶店

「ありがとうございます！」

そう言った青年の名はアラタ。戦いを終えた彼は喫茶店で働いている。

（この平和がいつまでも続きますように…）

そう思っていたが…

「うわっ!?!」

突然体に電流が走ったかのような痛みに襲われ、アラタは片膝をついた

が、なんとか起き上がるとカウンターの前に会計待ちの客がいる。

「失礼しました。ではお会計を…お客様？」

何かがおかしかった。さっき話しかけた客からは何の反応もないし、周りを見回しても誰の声も聞こえない。

「どうなってるんだ…？まさか！」

アラタは外へ飛び出した。やはり何もかもが止まっている。転びそうになっている子供、飛んでいる鳩を見て薄々感づいていた結論に結び付く。

「時間が…止まっている!？」

そう気づいた瞬間

「「おい！」」

「え…？モネ！アグリ！」

人の、それも仲間の声が聞こえてアラタは孤独から解放された。そして逆方向からは

「「アラタ〜！」」

「エリ…ハイドも！」

こうして5人の仲間が集結した。そして何が起こったのか議論することにした。

「いきなりビリビリ〜って来たからビックリしたわよ！も〜！」

「落ち着けモネ。まあ確かに俺もそうだったけどな、何だったんだあれ…」

モネをアグリがなだめながら疑問を出す。

「モネ達も？私もそうだった。子供の手当てをしてたら急に…」

「俺もだ、そのせいでフラスコを落としてしまった。」

エリとハイドも証言した。

「みんな電気を浴びたような痛みを感じたのは同じなんだね。」

「うん、とりあえず護星界に…あ、何これ！？綺麗」

モネが近くに落ちていた赤い物体を見つけてそれを拾おうとする。

「よせ！それは地球の物質じゃ…」

ハイドが止めようとしたがもう遅い。

「え？きゃあああ！」

モネが拾った物体は強烈な赤い光を放った。5人共驚いて目を覆った。

光が消えると5人も、赤い物体も消えていた。

しかしそれでも時は止まっていた…

プロローグ（ゴセイジャー編）（後書き）

次からはなのはStSサイドのプロローグです

プロローグ（なのはStrikers編）（前書き）

ゴセイジャーと比べると短いです

プロローグ（なのはStrikers編）

ここはミッドチルダ。魔法文明が発達した異世界である。

時空管理局機動六課にて：

「ミッドチルダ北部臨海第八空港で大規模な火災発生！大量のガジェットも向かってます！」

非常事態宣言と鳴り響くサイレンの中、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、スバル、ティアナ、エリオ、キャロがヘリに乗り込み、出発する

「私とヴィータちゃんはガジェットを倒すからスバルとティアナはレリックの回収をお願い。」

「はい！」

なのはの命令にスバルとティアナが返事をする。

「エリオとキャロはスバル達と一緒にレリックを回収して」

「「はい！」」

こちらはフェイトの命令にエリオとキャロが返事をする。

「それじゃあ…」

『セットアップ！』

なのは達はバリアジャケットを装備してそれぞれの場所へと散った

ブログ(なのはStrikers編) (後書き)

感想お待ちしております

e p i c 1 出会いは戦いの中で（前書き）

ここで二つの作品が交わります

epic1 出会は戦いの中で

「う…ん…ハッ!? これは…火事!? みんな起きて! 火事だよ!」

アラタは4人を起こした。

「どうしよう…火に囲まれてるよ!」

エリがとても不安そうに言う。周囲は完全に燃えており今まで焼け死ななかったのが奇跡である。

「そうだハイド、お前のシーイクパワーで」

「ダメだ、ゴセイパワーを無闇に使っては…」

ハイドがアグリの意見を否定しようとしたとき

ビュン!

複数のガジェットが光線を出してきた。アグリとハイドは避けた。

「今度は何よ〜!」

モネがさらに不機嫌になる。

「少なくとも味方じゃなさそうだね…やるしかない!」

アラタは懷からテンソウダーとチェンジカードを取り出す。それにならい、4人も同じ動作を行う。

『チェンジカード、天装!』

チェンジ!ゴセイジャー!

この電子音が鳴りアラタ達は天装戦隊ゴセイジャーに変身した。

するとハイドが

「しょうがない…まずはこの火を消そう!プレッシャワーカード、天装!」

スプラッシュ シーイックパワー!

テンソウダーから電子音が鳴ると地面から水が湧き出て火を消した。
そのせいで見えなかったガジェットがたくさん姿を表した。

「早く倒そう！」

エリの一言で5人は散らばりガジェットに向かっていった

「スカイックソード！はあっ！」

ゴセイレッドはスカイックソードでガジェットを素早く切り裂いて
いく

「スカイックショット！」

ゴセイピンクはスカイックショットでガジェットを撃ち落としてい
った

「ランディックアックス！おりやあっ！」

ゴセイブラックはランディックアックスでガジェットを叩き割る。

「ランディッククロー！はあっ！それっ！」

ゴセイイエローが装備したランディッククローでガジェットの中心やレーザーの発射部分を突きまくるとガジェットは地面に落ちた

「シーイックボウガン！」

ゴセイブルーはボウガンを上に向けて水の弾丸を発射し、それはガジェットに降り注ぎ爆発する。

「これで全部か？」

一通りガジェットを倒した5人は集結し、ゴセイブラックが言う。

「まだ油断するな。」

ゴセイブルーの一言と同時に近くに青い道が現れた。スバルのウィングロードである。スバルはそれを走り、やがてゴセイジャーの前で着地する。

「大丈夫ですか？…あなた達は？」

スバルはゴセイジャーの面々を見て内心驚きながらも尋ねる。

「俺達、気づいてたらここにいたんだ。」

ゴセイレッドが説明する。

「つて事は、次元漂流者…あ、続きは六課でやりましょう、このウイングロードをたどれば安全な場所までいけますから！」

「え？ああ、そうだね。ねえみんな、話は落ち着いてからにしよう。」

「ちょっと待て、俺達の正体をばらすわけには…」

「ちょっと待て、俺達の正体をばらすわけには…」

「大丈夫だよ、なんとかなるなる」

「全く…しょうがない、行こう。」

「「「おー！」」」

ゴセイレッドとブルーの意見が少し食い違ったが最終的にスバルの言うことを聞くことにし、ウイングロードを走っていった。

「ちょ、ちょっと待ってくださいーい！」

おいてけぼりにされそうになりスバルも後を追う。

スバルとゴセイジャー達はヘリの前までついた。スバルはバリアジヤケットを解除する。

ヘリの中からティアナが出てくる。

「あ、ティア！レリックはどうだった？」

「なんとか封印したわ。ガジェットに会って大変だったけど…ねえ、その人達は誰？」

「俺達は…あ、その前に変身解かなきゃ」

「おいアラタ」

「ここまで来ちゃったんだしもういいじゃん。それにスバルって娘

は悪い娘じゃなさそうだし」

そう言いながらゴセイレッドは変身を解いた

「こんなときでもいつも通りだな…」

ゴセイブルーは呆れながらも変身を解く。ゴセイブラック達もそうした。

「あ…」

スバルは驚いた。

「ええと…スバル…だっけ？六課って所まで案内してほしいんだけどいいかな？」

アラタはスバルに聞く。

「はい！じゃあへりに乗ってください。」

「じゃあ行こう、みんな」

アラタ達はヘリに乗り込みヘリはゴセイジャーと機動六課のメンバーを乗せて出発した。

e p i c 1 出会いは戦いの中で（後書き）

次はヤツの登場です。

epic2 復活

「ん…ここは…」

アラタ達が目を覚まし、ガジェットと戦っていた頃、別の場所で目を覚ました人物がいた。

彼は救星主のブラジラ。ゴセイジャーの真の敵。自ら死んだはずだったがこうして生きている…

「私は復活したのか…」

「時空管理局だ！武器を捨てて投降しなさい！」

ブラジラの前に6人の管理局員が現れる。ブラジラの姿は武装ではないのだが初めて彼を目にする管理局員はその事を知らない。

「ふん、ならば…力づくでやってみろ！」

そう言いながらブラジラは素早く剣を構え電撃を放った。とっさの攻撃に管理局員は避けられず全員が電撃をあびてしまう。

「「「「「ウワアアアアッ!」「」「」「」

管理局員は全員倒れ、その場で苦しむ。ブラジラは管理局員達に近づき

「愚かな人間共よ、死ね」

ブラジラは管理局員の1人を燃え盛る炎の中に放り込んだ。残りの管理局員達にも同じようにする。

「熱い熱い熱い熱い熱い!」

「ぎゃああああ!」

管理局員の悲鳴が響いた。

「ふん、うるさい連中だ。」

ブラジラは炎に焼かれる管理局員を無視してその場から去った。

e p i c 2 復活（後書き）

次からはなのは達も出す予定でいます

epic3 護星天使と機動六課

ヘリで機動六課本部まで送られてきたゴセイジャーの面々はスバルに案内され、部隊長室前に着いた。

「ここが部隊長室です。」

「部隊長？」

エリが聞きなれない言葉に疑問を抱く

「スバル：だったか、要はここで一番偉いヤツの部屋って事だろ？」

アグリが解説する。

「はい、じゃあ中に入りましょう。」

そう言ってスバル達は部隊長室に入る

「八神部隊長、次元漂流者の人々を連れてきました。」

「ご苦労様、スバル。せやけどそんな大声で言わなくても聞こえるで?。」

「あ、すいません…では失礼します!」

スバルはさつきとあまり変わらない声量で謝り隊長室を出た。

「さて、せっかくやしそちらのソファ―に座ってください。皆さん疲れたと思いますし。」

「それじゃお言葉に甘えて」

アラタははやてに返事するとソファ―に腰かけた。アグリ達も少し戸惑いながらも同じように腰かける。

「ほんならまずは自己紹介からですね。私は八神はやてといいます。この機動六課の部隊長です。」

はやては軽く自己紹介した。

「俺はアグリ」

「俺はアラタ」

「俺はハイドといいます。」

「あたしはモネ」

「私はエリ」

5人も自己紹介した。なお、座っている順番は左から順にアグリ、ハイド、アラタ、モネ、エリの順である。アラタの正面にはやてが座っている

「ところで、次元漂流者とは何でしょうか？」

先にハイドが質問する。

「時々、人がなんの前触れもなく世界からまた別の世界へ飛んでいってしまふことがあるんです…それに巻き込まれて別の世界に迷い込んだ人をそう呼びます」

「そのまんまの意味だな。」

次元漂流者の意味を理解したアグリは非常にわかりやすい結論を出した

「一応この世界の事も話します。ここはミッドチルダいうて魔法文明の世界なんです。で、ここが機動六課。私が部隊長を勤める場所です。」

はやてがミッドチルダと機動六課の解説をした。

「俺達が知らないだけでこういう世界もあるんだね。」
アラタが感想を述べた。

「それで、皆さんはどこから来たんです？」

はやてがアラタ達の出身世界を聞く。するとハイドが答える

「俺達は元々は別の世界の出身なのですが訳あって日本に住んでいました。」

「日本ですか：私もその出身なんです。とにかく地球まで行ければ良さそうですね。」

「できれば天知天文研究所がある町の場所を探して下さい。」

「わかりました。ちょっと待っててください。」

はやてはモニターを出し、

「グリフィス君？天知天文研究所って建物を探してほしいんや。場

所は地球。」

「了解しました。」

通信が切られた。

「で、本題に戻りますけど…皆さんはどうやってここに来たんのです？」

「俺達にもわかりません。その時地球の時間が止まって俺達5人が動ける世界になって…」

「そしたら足元に落ちてた赤くてきれいな宝石を拾ったら…」

「この世界に飛ばされてたんです。」

ハイド、モネ、アラタの順に説明する。

「赤くてきれいな宝石、それって…」

「失礼します」

はやてが質問しようとするのと部隊長室になのはとフェイトが入ってきた。

「はやて、この人達は？」

フェイトが尋ねる

「この人達はスバルが保護した人達や。」

5人は口々に自己紹介した。

「高町なのはです」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

なのは達も自己紹介しはやての隣に座る。はやてはこれまでの説明をした。

「それで、赤くてきれいな宝石の事なんですけど、もしかしてこれの事ですか？」

フェイトがレリックの写真を見せる。

「そうそうこれこれ！」

モネが過剰に反応する。

「モネ落ち着け。で、レリックって何なんですか？」

アグリがモネを止めながら聞く。

「管理局でも詳しいことはよくわからないんです。使用用途は不明でわかるのは1つでも世界を滅ぼしてしまう結晶体ということくらいで：さっきの火災もレリックが原因みたいなんです」

なのはが説明した。

「地球の時間が止まったのもレリックのせいなのかな？」

エリが意見を出した。

「わからない：だが関与していないとも言いきれないな。」

ハイドが答えた。すると通信が入った。グリフィスからである。

「八神部隊長、天知天文研究所の事なんですが…」

「ご苦労様、どうやった？」

「天知天文研究所という建物は見つかりませんでした…」

「そんなバカな！」

アグリが驚く。

「お兄ちゃん落ち着いて！」

モネが必死で止める

「あ…そうだな。驚かしてすまん。」

アグリは素直に謝った

「あ、いえその…」

グリフィスはどうしたらいいのか迷っている。

「グリフィス君、仕事戻ってええで、ありがとうな」

「あ、はい」

グリフィスは通信を切った

「俺達の住む地球と八神部隊長の知る地球、そしてこの世界。世界とは次元を隔てて多く存在するものという説もある。」

少し間をおいてハイドが解説した。

「へーそういうのあるんだ」

モネは納得したようだ。

「でも、帰れないとなると俺達はどうすればいいのかな…」

アラタが腕を組み考えるが結論は出ない。するとはやてが意見を出す。

「皆さん、もしよかったらこちらで民間協力者って形で保護されてみませんか？」

「民間協力者？」

アラタが答える

「はい、聞いた話だとガジェットをたくさん倒したみたいやし：あ、ガジェットっていうんはあのロボットの名前です。」

「しかし俺達の力は：」

天装術について知られるのはまずいと感じたのかハイドが話そうとすると

「「「よろしくお願いします！」「」」

ハイド以外のメンバーは彼を差し置いて納得したようだ。ハイドが小声でアラタに話しかける

（おいアラタ、天装術の事がばれたらどうするんだ！）

（まあいいじゃない。それにこの人は俺達を保護してくれるんだか

らとりあえずここにしようよ。」

（確かに行くあてはないしな…お世話になるか。）

ハイドも納得したようだ。それを察知したのかはやてが次の段階に入る。

「それじゃ、皆さんの魔導師ランクを調べるためにこれからテストします。」

「魔導師ランク…あたし達の力を試すってこと？」

モネがいち早く理解した。

「そういうことです。場所はこれから案内します。」

はやて達が立ち上がりアラタ達もついていく。その道中、フェイトは念話を送った。

（はやて、この人達何者なのかな？）

（わからへんけど…悪い人達やないのは確かやね。）

（スバルが見つけたんだもん。いい人達だし、きっと私達の力になってくれるよ）

（うん、そうだね。）

なのは達はアラタ達の事を話していた。

epic4 戦えゴセイジャー（前書き）

今回はテストです

epic4 戦えゴセイジャー

はやて達に案内されてアラタ達は廃墟にたどり着いた。

「ここで戦うの？」

アラタが聞くと

「そうです、皆さんはあの辺りで待機しててください。ちょっとこちらで準備するんで。」

はやては去っていき、アラタ達は指示された場所に集まった。

「どんなのが出てくるかな？」

「油断するな、不意打ちをしかけてくるかもしれないぞ」

ハイドがノリノリなエリを注意すると

『皆さん、テストの準備が出来たんでそちらも戦いの準備をしてください。』

「「「「はい！」「」「」」

はやてがモニターから指示を出し、5人がテンソウダーを取りだし

「「「「チェンジカード、天装！」「」「」」

チェンジ、ゴセイジャー！

アラタ達はゴセイジャーに天装した。

「準備できたぜ！何でもきな！」

アグリことゴセイブラックはヤル気満々だ。すると目の前に15体のガジェットが現れる。

『皆さんはそのガジェット達を倒してってください。テストが終了したらまた合図を出します。』

はやては通信を切った。

「行くぞ、シーイックボウガン！」

ハイドことゴセイブルーがガジェットに向かって矢を放ち、ガジェットを殲滅した。しかしその爆煙からまたガジェットが現れ、3つの建物からもガジェットが出てくる。

「みんな、一旦別れて戦おう！」

アラタことゴセイレッドの一言に皆が頷き、一斉に散った。

「ランディックアックス！とりゃあっ！」

空港の時と同じようにガジェットを叩き割っていくゴセイブラック。

「どわっ！」

しかし上から現れたガジェットからビームをくらってしまふ。

「あんな上じゃ届かねえな…なら！」

ゴセイブラックはカードを取りだしてテンソウダーに読み込ませる

「ロックラッシュカード、天装！」

エクスプロージョン、ランディックパワー！

地面から大きな岩が現れ、

「はあああ…はあっ！」

ランディックアックスで打つと飛んでいった岩はガジェットを破壊した。

その頃、モネことゴセイイエローは建物の中でランディッククローを使いガジェットと戦っていた。が、ゴセイイエローの動きを学習したのか攻撃はかわされてしまう。

「ちょこまか動かないでよ！」

モネが怒りながらカードを取りだし

「ロープラントカード、天装！」

アウトブレイク、ランディックパワー！

すると地面からツタが現れ、ガジェットを拘束する。

「これで！それっ！」

拘束されたガジェットを次々と破壊していった。

「「コンプレッサンダーカード、天装！」」

スパーク、スカイックパワー！

ゴセイレッドとエリことゴセイピンクは行動を共にし、ビルの屋上で戦っていた。雷雲が発生し、そこから強い雷がガジェット達を破壊していく。

「ふう、結構簡単に倒せたね、アラタ。」

「うん。一旦もといた場所に戻ろうか。」

2人はその場を離れた。

5人が散り、道路で戦っていたハイドことゴセイブルーもスタート地点に戻ろうとしていた。するとビルの谷間からガジェットが現れ、彼らは集合してゴセイブルーの前に立ちふさがる。

「くっ！プレッシャーカード、天装！」

スプラッシュ、シーイクパワー！

ガジェット達の横から大量の水が吹き出し、ガジェット達は建物を叩きつけられる。それぞれの衝撃でガジェットの機能は停止した。

「みんなそろったな？ん、あれは！」

ゴセイブルーが全員集合したことを確認すると今度は背後からガジェットが一直線に向かってくる。

「まだいるの！？」

ゴセイイエローは驚きを隠せない。

「こうなったら、ゴセイグローバルだ！」

5人はテンソウダーにカードをセットし、

「「ツイストルネードカード」」

「「スパークエイカード」」

「プレッシャーカード」

「「「天装！」」「」」」

ツイストルネード、スパークエイク、プレッシャーを同時に使用し、ゴセイジャーの前に三角形が現れた。それはガジェットへと向かっていき、ガジェットは全て消滅した。するとはやてから通信が入った。「お疲れ様です。これでテストを終わりにします。これからフェイトちゃんをそちらに向かわせますから指示に従ってください。」

通信が切れてすぐにフェイトがやってくる。同時にゴセイジャーは天装を解いた。

「お疲れ様です。では着いてきてください。」

「どれくらいいったかな？」

「結構上だと思うよ。」

「まあ一度戦った相手だからな。」

エリ、アラタ、ハイドのは結果が楽しみのようだ。

「モネはどうだった？」

「空港の時よりは楽しかったよ。」

それぞれの結果を楽しみにしながらフエイトに着いてった

e p i c 4 戦えゴセイジャー（後書き）

トライアングロバルって全員でやるんだったかな…違ってたらすみません

epic5 天使のランク（前書き）

今回は自己紹介をします

epic5 天使のランク

フェイトに案内され、アラタ達は再び部隊長室に案内された。そこにはすではやてとなのはがいる。全員が席に着きなのはが話す。

「それじゃ、皆さんのランクを発表します。AAAランクです。」

「「「「早っ!」「」「」」」

前置きはあったものの、サラッといわれて驚いたアラタ達。そんな中ハイドが質問する。

「それは、上からどれくらいの位置なんでしょうか。」

「ランクは全部で11個あって皆さんのランクは上から4番目です。」

「なーんか微妙な感じ。」

「いいじゃない、ベスト5に入るんだよ!」

モネは納得いかないという感じだったがエリは満足しているようだ。

「で、これが民間協力者用の名札です」

はやてはアラタ達の前に1枚ずつ名札を出した。

「これが民間協力者の証しです。現場に行くときにこれを見せれば証明書として使えます。」

「ってことは…俺たちは君たちの仲間になれたってこと?」

皆がそれぞれの名札をしまう中アラタが質問した。

「はい。それと、自己紹介もしたほうがいいですね。皆入ってええよ」

はやてが呼ぶと部隊長室にスバル、ティアナ、エリオ、キャロ、シグナム、ヴィータ、シャル、リインフォース?、ザフィーラ（狼形態）が入ってきた。

「皆、機動六課の一員です。まあほんの一部ですけど」

「じゃあ俺から自己紹介するね。俺はアラタ戦うときはゴセイレットに天装するよ。」

「私はエリ。ゴセイピンクに天装するの。」

「俺はアグリ。ゴセイブラックに天装するぜ。」

「あたしはモネ。ゴセイイエローに天装して戦うんだ」

「俺はハイド。ゴセイブルーに天装する」

ハイドは馴染んだのか、敬語ではなくなった。

「じゃああたしから！スターズのスバル・ナカジマです！好きなものはアイスで…」

「スバル落ち着きなさい！あ、私はスターズのティアナ・ランスターです。」

「で、あたしがスターズの副隊長ヴィータだ」

「スターズ隊長の高町なのはです」

「ライトニングのエリオ・モンディアルです。」

「同じくライトニングのキャロ・ル・ルシエです。で、こっちが竜のフリードで私の友達です。」

「きゅる」

「ライティング副隊長シグナムだ」

「ライティング隊長のフェイト・テストロッサ・ハラオウンです。」

「私はリインフォース？ですう。皆さんリインって呼んでください
！」

「ザフィーラだ、よろしく頼む」

「私はシャルです。」

「そして、私が八神はやていいいます。ここ機動六課の部隊長です。」

「みんなよろし…」

アラタが言おうとした瞬間、サイレンがなった。

「敵か!？」

ハイドが反応する。

「六課を案内したかったけど、そうもいかないね…皆さん着いてきてください！」

はやて、シャマル、ザフィーラ、リイン以外の六課メンバーが走る。それにアラタ達は名札を懐に入れながらついていく。

「もう、こんなときに！」

「とっととやっつけに行こう！」

モネとエリが走りながら話す。

「なあアラタ。」

「何、アグリ？」

「何で子供がここにいるんだろうな？あと、妖精みたいなのと喋る狼もいたしな…」

「何か事情があるのかもしれない、あとでこっそり聞こう。」

ハイドが割って入り、疑問は後回しになった。

しばらくして、全員がヘリポートに着いた。

epic5 天使のランク（後書き）

ちよつと手抜きだったかな…次から戦闘になります。一旦本家の戦い方を確認してから書こうと思います

epic 6 新たな勢力（前書き）

今回は列車での戦いです。

epic6 新たな勢力

「みんな着いたね、それじゃへりに乗るよ。」

なのはが全員いることを確認し誘導した。そしてへりが出発する。

「それで、俺たちはどこに向かってるんだ？」

ハイドが問う。するとシャーリーからの通信が入った。

『これから向かう電車の中にレリックとガジェットの反応があります。20機ほどのガジェットもそれに向かってるみたいで…』

「ありがとう、シャーリー。」

フェイトがお礼を言うとなのはが説明する。

「今回の任務はガジェットの殲滅とレリックの回収。それぞれの隊長と副隊長で向かってるガジェットを迎撃します。ティアナ達はレリックの回収を、アラタさん達はガジェットの破壊に専念してください。レリックは列車の先頭にあります。」

「「「了解!」」」」

ティアナ、スバル、エリオ、キャロが返事をした。

「みんな、全力で行こう!」

「「「おう!」」」」

アラタの言葉はエリ達をさらにやる気にさせた。が、ここでアラタに疑問が。

「そーいや、なのは達はどーやって戦うの?」

それを聞かれ、なのはは懷からレイジングハートを出す。

「これでセットアップして戦うんです。それぞれいろんなデバイスがあるんですよ。」

話をしているうちに電車が見えてきた。同時にヘリの入り口が開く。

「飛び降りて変身するのか…」

「なんかかっこいい!」

アグリが少し驚き、エリが非常にノリノリだった。

「高町なのは、行きます!!」

そういつて飛び降り、

「レイジングハート、セットアップ!」

なのははバリアジャケットをまとい、手には杖となったレイジングハートを持っている。他のメンバーもそれに倣い、飛び降りてセットアップする。

「いよいよ俺たちの番だね、行こう!」

アラタ達が同時に飛び降り、

「「「チェンジカード、天装!」」」

チェンジ、ゴセイジャー!

アラタ達はゴセイジャーに天装し、列車の上に飛び降りた。ゴセイレッドの足元に穴が開いている。

「ここから入ろう。」

ゴセイレッドが入り、残りのメンバーもついていく。電車の中にはティアナ、スバル、エリオ、キャロがいた。幸いガジェットはいないようだ。するとティアナが指示を出す。

「私たちが先頭に立ちます。ゴセイジャーの皆さんは私たちについてください」

「了解！」

ティアナ以外の全員が返事をした。そして次の列車に入るとガジェットがいた。

「行かせないって言ってる感じですね…」

エリオがストラダーを構える。

「ゴセイジャーの皆さん！お願いします！」

「ああ！」

ティアナとアグリの会話が終わると全員は一斉に飛び出していく。ガジェットはティアナの前に立ちふさがろうとするが

「アイストップカード、天装！」

スプラッシュ、シーニックパワー！

ゴセイブルーの天装術がガジェットを凍らせて動きを止める。ゴセイレッドたちはそれぞれの武器でガジェットを粉碎した。

「今のうちに！」

「はい！」

ティアナが返事をし、次の列車に乗り込むがやはりガジェットがいる。

「強行突破はムリね…ゴセイジャーがくるまで戦うわよ！」

ティアナの指示で全員が散り、ガジェットと戦う。ティアナはクロスマイラージュでガジェットを撃ち、スバルはガジェットをリボルバーナックルで殴り、エリオはストラダーでガジェットを切り裂く。キヤロはエリオをサポートの魔法をかけている。ゴセイジャーも駆けつけ、あとから来たガジェットを倒す。

その頃上空ではなのは、ヴィータ、フェイト、シグナムがガジェッ

トと戦っていた。

「数が多いね…いくつか突破されちゃったし…」

「少しでもブツ倒さなきゃな！」

なのはとヴィータがガジェットを倒しながら話す。

「ファイア！」

「はあっ！」

フェイトとシグナムは次々とガジェットを倒していく。

「おい！なんだあれ！？」

ヴィータが指を指すとその先にはいつものガジェットとは違う姿をしたガジェットがいた。いつものガジェットはカプセル状の姿だがそこにいたのはまん丸のガジェットだった。それはこちらに向かってくる。

その頃、撃墜されたガジェットの近くに何者かが立っていた。救星主のブラジラである。

「護星天使の力を感じたが…もしやあの列車の中か？」

ブラジラは翼を広げ空を飛ぶ。誰かにバレないように木のてっぺんから様子を見る。列車を見る前に彼の目にはなのは達がガジェットと戦う姿が見えた。

「あの機械の軍団に力を貸してやるとしよう。」

ブラジラが指を鳴らすとどこからかコウモリのような不気味な怪物が現れた。ビービ虫である。それら6匹がまん丸のガジェットへと向かう。

「あれは!？」

フェイトは突然現れた存在に驚く。まん丸ガジェットではなくビービ虫を見てである。するとビービ虫は棒状になりガジェットに刺さる。それはたちまち巨大化し、収納されていた腕でフェイト達に襲いかかる

「きゃあっ！」

「なんなんだあれは…うわあっ！」

フェイトとシグナムは驚いてスキを疲れてしまった。巨大ガジェットは真っ先に列車へ向かう。

その頃、列車内のガジェットを殲滅したティアナ達はレリックを回

収めた。ゴセイジャー達は彼女らを守るように囲んでいる。

「やったね！ティア、早く報告し…」

『みんな！その列車から逃げて！巨大化したガジェットがそちに…』

スバルの発言を遮ってシャーリーからの通信が入った。すると爆発音とともに列車の天井の半分が崩れた。幸いその下には誰もいなかった。

「何なんだよあれ！？」

「あんな大きなガジェットもいるの！？」

ゴセイブラックとスバルが驚く。

『あのガジェット、コウモリみたいなのにくつつかれてから巨大化したの…』

シャーリーから説明を聞いてゴセイレッドがすぐに反応した。ガジェットが巨大化した理由に…

「それってまさか…」

言い終わる前に巨大ガジェットは列車の前に立ちふさがり、列車はそれに激突し止まってしまう。

「うわあああああああっ！」

列車の中にいたティアナ達、ゴセイジャー達は脱出する前に列車の揺れに翻弄され転んだ。巨大ガジェットは腕を振り上げ、列車を潰そうとした。

（こんな…ところで…）

ティアナが諦めかけたその時

「俺にまかせろおおおおお！」

突然の大声と共に巨大ガジェットが殴られ落ちていく。ゴセイジャー達はその声の主の名を読んだ。

「」「」「データスハイパー!?」「」「」

「みんな無事かあ!？」

同時に巨大ロボットが着地したような大きな音が響いた。ゴセイレッドはジャンプして列車の上に上がり外を見る。

「データスハイパー…それに、あそこにいるのってゴセイナイト…いやゴセイグランド!」

飛ばされながらも何とか起き上がった巨大ガジェットの前にはゴセイグランドがいた。ゴセイレッドはそれを見て驚く。

「ここからは、私のターンだ。ビクトリーチェンジカード、天装!」

ゴセイナイトのアイテム、レオンセルラーにビクトリーチェンジカードがセットされる。

「地球^{ほし}を傷つけ汚す輩は…地球^{ほし}と私が許さない! グランドラスティック!」

両腕から6つのミサイルが発射され巨大ガジェットに向かっていく。

ゴセイグランド自身も突撃し、巨大ガジェットは爆散した。

「すげえ…」

「巨大ガジェットがあんな簡単に…」

ヴィータとなのははその場で茫然としていた。するとティアナから連絡が入る。

「なのはさん、レリック回収に成功しました。…なのはさん？」

ティアナからの通信でなのはは驚く。

「え、ティアナ！？あ、うん、やったね！じゃあ帰還しよう！」

突然の通信でまともな返事ができなかった。

「あれってアラタさん達の仲間なんですか？」

エリオがゴセイジャーに聞いた。

「ああ、詳しいことは本部に戻ってから話す。」

「データス、ゴセイナイト！俺達についてきて！」

「おう！わかった！」

「合体を解いてからついていく。」

データスハイパーとゴセイグランドは納得した。そして一同はヘリに乗り六課本部に戻る。後からデータスとゴセイナイトもついてきた。

その頃…

「これで計画通り…あの機械の主はビービ虫に驚くことだろう。…ん？」

ブラジラは爆発した巨大ガジェットの残骸の前で呟いた。すると背後から気配を感じた。

「隠れてないで出てくるといい、私はこの機械の持ち主を探しているのだ。大方その部下だろう？そこにいるのは」

ブラジラが指をさすと

「見つかったでしょうがないッスね。」

木の陰から3人の少女が現れた。ジェイル・スカリエッティが造った戦闘機人軍団ナンバーズの一員、ウエンディ、オットー、ディードだ。

「私の名はブラジラ。お前達の主に会いたい。案内してもらおうか。あの機械を巨大化させたのは私だ。」

「いいッスよ。元々そのために来たんスから。でも変なマネはしないでほしいッス。」

「心配はいらん。これから世話になる相手の部下に手をかけるほど私は愚かではない。」

「仲間になること前提ッスか…じゃ、ついてくるッス!」

ウエンディ達がブラジラを誘導する。

（不気味な奴と苦手なオットーとディードに囲まれるなんて…辛いッス）

（フフフ…さて、次は…）

ウェンディが精神的に追い詰められる中、ブラジラは次の計画を練っていた。

e p i c 6 新たな勢力（後書き）

書き直した方がいいかな…？

epic7 再会

任務を終えた機動六課とアラタ達はヘリから降りた。気づけば夕方だ。そして遠くから何か飛んでくる。データスとゴセイナイトだ。

「おい！こっちだよー！」

アラタが両手を大きく降りながら誘導する。そしてその目の前にデータスとゴセイナイトが着陸した。

「アラタさんお久しぶりでっす！」

「相変わらずだな、ゴセイレッド。」

データスとゴセイナイトが返事をする。

「さっき戦ってたロボット！？でも見た目もそうだけど口調も全然違う…」

「かっこいいな…」

スバルはデータスの見た目と口調に驚き、エリオはゴセイナイトの姿を見て目を輝かせていた。

「ここじゃ何だし部隊長室に行こうぜ。」

「そうだね、データスさん、ゴセイナイトさん、ついてきてくれますか？」

ヴィータとなのはが提案する。

「はいです！」

「うむ」

データスとゴセイナイトはヴィータ達についていく。それに連動して六課メンバーとアラタ達もついていった。

その頃、どこかの研究室では…

「ドクター、ガジェットを巨大化させたって言う奴を連れてきたッスよ」

「ご苦労だったね、ウエンディ、オットー、ディード。君たちは一旦休みたまえ。」

「了解ッス。」

「「了解…」」

ブラジラとスカリエッティを残してウエンディ達は去っていった。

「さて、まずは自己紹介からするとうしうか。私はジェイル・スカリエッティ。生命技術の研究をする者だ。」

「私は救星主のブラジラ、星を救う者でございます。一度死んだ我が身ですがこの世界に再び復活しました。」

スカリエッティは『再び』という言葉が気になった。

「『再び』ということは君は一度死んだのかい？」

「そのようなものです。私の目的を邪魔する護星天使共によって…」

「まあ君の過去の話はいい。ガジェットを巨大化させた手品のタネを教えてくれないかい？」

「いいでしょう。」

ブラジラはどこからかビービ虫の巣を取り出した。

機動六課の部隊長室ではデータスとゴセイナイトの自己紹介が一通り終わっていた。

「そういえば、どうしてデータスさんとゴセイナイトさんがここに？」

はやてが質問した。するとデータスが答える。

「そのまえにマスターヘッドをお呼びするのでちょっとほしいです。」

データスの顔の部分であるモニターにマスターヘッドが映し出された。

「「「「マスターヘッド!？」」「」」」」

アラタ達は一斉に驚く。

「久しぶりだな。未来ある護星天使達よ。お前達とこうして会えるということはデータスとゴセイナイトは合流できたということだな。」

」

驚きのあまりアラタ達は言葉が出ない。そんな中、はやてが話し出す。

「あの、お話し中失礼します。あなたがマスターヘッドさん…ですね？私は八神はやていいいます。機動六課の部隊長でアラタさん達を保護してます。」

「はやて、護星天使達を保護していただき感謝する。私はマスターヘッドだ。よろしく。」

「よろしく願います。」

はやてがお辞儀した。そしてマスターヘッドが話し出す。

「さて、先に聞かれるだろうから結論だけ言うが…地球の時はいまだに止まっている」

「そんな…」

アラタは落胆した。

「そういや、時間が止まったとき、ゴセイナイトはどうしてたんだ？俺達が動けてたんならお前だって……」

アグリが質問した。

「うむ、私が眠りについてたとき、電撃を浴びたような痛みを感じ

じた。そのせいでしばらく動けなかったがただ事ではないと感じた私は町を飛び回ってゴセイジャーを探していたが見つからなかった。地球に手がかりがなかったので私は護星界に戻り、マスターヘッドに事情を話したのだ。」

「モネがああ赤いのを拾ってなきゃな…」

アグリが呆れたような口調で言う。

「しょうがないじゃん！キレイだったんだから！」

モネが怒鳴る中、ハイドがマスターヘッドに問う。

「それで、その後護星界では何があったのですか？」

「一度は私の力でどうにかしようと考えたが何もできなかった。お前達の行方もわからず悩んでいたとき、護星界に次元の入り口が現れたのだ。ゴセイナイトは『この先に彼らがいる気がする』と言ってそれに飛び込んだ。そして私はデータスにゴセイナイトを追うよう命じた。お前達護星天使に会えることを信じて。」

「そしてたどり着いたのがこの世界だ。」

「で、俺達に再開したというわけか…しかし地球の時はどうやって動くんだ？」

ハイドが納得したと同時に止まった地球について考える。部隊長室にいる面々も考えるがやはり答えは見つからない。

「マスターヘッドさん、私は高町なのはといいます。ちょっと質問があるんです。」

今度はなのはがマスターヘッドに話しかける。

「何かね？なのは。」

私達、ガジェットっていう機械の軍団と戦ってたんです。そのとき、ガジェットに何かコウモリみたいなのが取りついたと思ったら。急に大きくなって…」

「それはビービ虫といって救星主のブラジラが作り出す生命体の仕業だ。」

マスターヘッドではなくハイドが答えた。

「救星主のブラジラ？」

なのははブラジラという名前が気になった。

「それについては私が話そう。1万年前、最強の護星天使と呼ばれた者がいた。」

マスターヘッドが語り始める。

「彼は他の護星天使達と共に地球に降り立ち、その力と命を奪い、幽魔獣のリーダー的存在達と戦って彼らを封印した。」

「自分の仲間を…ひどい！」

スバルが拳を握りしめる。

「でも、その話とんとかのブラジラって奴とどう関係があるんだよ？」

ヴィータが少し不満そうな口調で聞き出す。

「まあ最後まで聞いて。」

エリがしゃがんでヴィータの頭を撫でる。

「あ…わ、わかったよ。」

ヴィータは赤くなり少しうつむいて黙ってしまった。

「それで、その護星天使はどうなったんですか？」

エリオが不安げに聞く。

「うむ、仲間を犠牲にした彼は罰を下されることになった。だが彼はそれを良しとせず、未完成の天装術で時を越えたのだ。」

「まさか、その最強の護星天使がブラジラ…？」

フェイトが尋ねた。

「そうだ。時を越えて現代に來たブラジラは多くの存在を利用してきた。」

「そして何度も俺達の前に現れて、最終的に地球を粉々にしようとしたんだ。俺は奴に一撃を与えて、追い込んだけど『破壊だけは果たす』っていつてあいつは目の前で自害した。」

マスターヘッドに続いてアラタが解説する。この時の彼はいつもの優しい表情ではなくとても真面目な表情だ。

「じゃあビービ虫がいるってことはブラジラもこの世界に？」

ティアナが聞いた。

「絶対そうよ！どうせまたどこかで誰かにごますりしてるに決まってるわ！」

モネが声を荒げて話した。

「もしそのブラジラと戦うことになったら私達、勝てるんでしょうか…」

キャロはとても不安そうだ。

「他にもついて聞きたいけど…もう夜やね。続きは明日にしよう。みんな今日ばゆっくり休んで。」

『はい！』

はやてが皆を気づかい、一旦話は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4720y/>

魔法少女リリカルなのはGoseigers

2011年11月29日19時52分発行